

Senshi-Dive

目次

「弦楽器イルカの頭ン中」	1
「我々は夢の終り、天国の終焉を生きている。」	3
「たとえば、食物センイに死体の山。」	4
「白目。」（この回では新趣向として、次回予告が入ります。）	6
「ワシの名は末期ガン。」（この回では新趣向として、ちょっとしたアドバイス があります。）	7
「地を這うキャタピラこそ希望にふさわしい移動手段ではないか。」（この回で は新趣向として、ちょっとしたこぼれ話が聞けます。）	9
「まるで踊る花だ。」（この回では新・新趣向として、逆に何も設定しません） .	11
「まるで巨大なアリだ。」（この回では一文を二十文字以下にします。新趣向と して）	13
「行け、少年よ。」（この回では新趣向として、突然打ち切りの決まった少年漫 画の最終回っぽくします。）	15
「しばし目が光る。」（この回では新趣向として、ダイジェスト版でお送りし ます。）	17
「物語じゃないはじめの頃が面白かった」（この回では新趣向というか、諸事情 でだいぶトーンが変わります。）	18
「あとがきにかえて」（弦楽器イルカを名乗る前の覚え書き。一部加筆）	21
奥付	23

Senshi - Dive

弦楽器イルカ



「弦楽器イルカの頭ン中」

あまりにも寝苦しい東京の熱帯夜にたまりかね、フリチンにジャージ上下一枚まとい、ボロボロの黒財布を手に表の自販機で薫り高い麦茶を購入した。取り出し口が壊れだらしく半開きの自販機から、取り出したる冷えた缶のプルタブを一気に押し上げ口に含んだその瞬間、スパーク。

自ら薫り高いと名乗る麦茶のせいか、体温が2度ほど上昇するのを実感しつつ、なぜか何か悟ったような麦茶体験をする。今までのオレは人生にお茶をかけてあっさりすすろうとしていた、それもぬるめの茶で。今後飲み込むなら固形を目指そう。喉に鈍い痛みをともなう異物感こそが生きている証と前向きにとらえよう。

——2002 年 東京。

もしも世界が百人の村だったら、たぶん狭い。

地球が小さくなるのか、人間が大きくなるのか、どちらにしろ寝転ぶと日本列島くらいの人間が百人いる感じだろう。ユーモラスな巨人たちが大陸全土でかくれんぼしたり、北極で雪合戦。たまに自分が投げた雪だまが一周して頭に当たるなど、なごやかムードの笑い声が成層圏まで響くエピソードも。平和な世界。

だがその平和も、永くは続かなかった。食べものが足りなくなるから。それもあつという間に。あとはもう互いの人肉を喰らい合う、巨人バトル・ロワイヤルに。

——2002 年 東京。

ここはアスファルトに咲く花の品評会会場。街の至るところで、審査員たちは審査結果を歌にして発表。アスファルトに咲く花の強さ、たくましさを歌いあげる。まるで、アスファルトに咲く花のように歌いあげる。人の手で敷かれたアスファルトのせいで物言わぬ植物たちが片隅に追いやられている件。とりあえず無視を。

——2002 年 東京。

近未来と呼ぶにふさわしい、レトロ・フューチャーな街。科学は一昔前のマンガを再現することに躍起。やたらと車を飛ばせたがり、テレビを薄くしたがり、歩道を動かしたがる。「ロボットはやはり人型二足歩行で」という少年のような発想が、すべてを悪くする結果に。医学は次々と難病を克服し、人がより死なない。無差別大量生存があちこちで起こる。便利グッズとしての科学が、人間一人ひとりをより粗末にしていく。

2002 年 5 月 14 日を生きる人々にとって、もう一つの宇宙で何が起こっているかなど知りようもない。ましてや四方を海に囲まれたこの島国においては、隣でだれが何をしているかさえ深く知る気もないまま、あやふやな輪の中で、ただ足並を乱した者だけが外され、代わりのだれかが補充される。問題を野放し先送りするだけの平和。だれもが何かを変えてもらいたがり、どこかでだれかがなんとなく良くしてくれる革命を夢見がち。いつ果てるとも知れない堂々巡りに、代わりのだれかだらけの輪がぐるぐると回り続ける。

——2002 年 東京。

「我々は夢の終り、天国の終焉を生きている。」

センシは力強い塊だ。力強い。転んでも決して泣かないか泣くかは別としても、常に拾う。転んだら常に十円拾う。常に十円だけをつけ狙う。輝き出す。十円玉が手の中の汗で。ずっと握ってあたたかい。ぽっかぽか。集団登校の冬の寒い日、手袋がなく十円玉を握りしめ、「ぬくいから試してみな」と言った友達に、それは違うと思った。問題は手のなかでなく、手の外が寒いことだ。でも友達は貧しい友達だったので笑って「それはよかったね」って。幸せな時間。常に八方美人なセンシ。でも決して握るのを試したりはしない。センシ・マチュピスト。名前っぽい。

センシは負けない塊だ。負けない。決して勝負を投げ出さないか投げ出すかは別としても、常に抜かない。自転車で追いぬかれたら常に抜かない。追い抜かさない。そのままびったりマーク。信号で止まったら後ろでニヤニヤ。不必要に近距離で。敵のサドルあたりを見ながら、でも決して目を合わせない。戦いは戦いを生む。勝って負けて勝って負けて、抜きつ抜かれつのデッドヒートも最後はうやむやに。肩組んで。がんばった人が一等賞とか、全員合格ワッショイとかそういうのセンシは認めない。だから常に勝つ。他人とは違う勝ちかたで。同じ土俵ではない。常にニヤニヤ勝ちっぷり。溢れるマチュピズム。

センシは説教くさい塊だ。説教くさい。本屋に並ぶ本に一人説教。「なんとなく世界がちょっとした百人の村だったらなあなど、便利グッズ並の思いつきだ。本当は百人じゃないからこそ問題が起こる。百人の村なら一人死んでも大事件だが、五十億の村では百や二百死んだって何も変わらん。ありのまま一人一人の顔がないから、たくさんの他人を一くくりにして、差別し、民族が対立する。五千万を一人に換算してはしゃぐのは勝手だが、もし世界を本当の意味で百人の村にしたいなら、国をたたく民族をごちゃ混ぜにするか、みんなで殺し合ってもう一度リセットするか、二つに一つだ」。

いいかげんさらけ出せ。今こそチャンスと。まとわりつく服をなぎ払い、フリチン・チャンスだ。みんなで国会議事堂に押し寄せて記念撮影。そして暴動。ゲバ棒持って、見よう見真似で滅多打ち。最後は壁に寄せ書き。やけくそな気持ちで、天下統一といえバジンギスカンのこときくと忘れないとか。たまに思い出すって。チンギスハーンとか、チグリス・ユーフラテスとか、混ぜながら。ジンギスハーンとか。チグリスカーンとか。きくと忘れないって。

我々は夢の終り、天国の終焉を生きている。だが、この夢には続きがない。この天国には、次に上る階段がない。ここではだれもが同じように眠り、同じような夢を見る。起きてても覚めない夢。寝ても起きない夢。

現実が残酷だから、せめて物語には希望を。そんな貧乏くさい発想は控えめに主張しろ。行きつく先はみな同じ死だ。ぐちゃっと潰れるのみ。

潰れるなら、もろ手を上げて。向こう側まで届けとばかりに突き破る気持ちをこめてほしい。ついで死に際の歌にも気を配れ。つまらないサビの部分だけのハミングに罰を。もっと腹の底から呼吸法。嗚咽。もしそこでギリギリの涙が出ても、声が出せる訓練をしろ。歌をやめてはいけない。死に際の歌声は妙に心に残るし、人々は常に他人の死に際を心のなかだけでそっと採点しているので、歌が人々の心のなかにある採点ボードに欽一を出しやすい。高得点の隠れキャラ。という噂。
「かけそば禁止令」。

その土地では、一杯のかけそばを家族三人で分け合って食べるという、主に小さな器を使って起こる出来事ははじめてから禁止されている。他にも、お国のために爆弾かついで敵陣に突っ込むとか、トイレ掃除美容法（歌付き）など、主にメンタル面に影響する刺激はいっさいなし。かけそばは一人一杯ずつ。爆弾は投げ捨てること。トイレと美容（と歌と祖母）は分別すること。他にも、曲がり角で転校生にはぶつからない。大型客船、沈没せず。奥さんが髪を切ったら、旦那は金時計を売らない。など。

そうやってできた物語の畸形たちが、今叫びを上げる。アンチとしてではなく。もはや人間が活躍しない種類の本が読みたい。人間が登場した時点で本を置いて立ち去れ。そこから先は想像ですませ。そこはまさに無人島かもしれないが、遠く汽船が幻のように行きすぎるかもしれない。そのときだ。

大きく両手を振って叫ぼう。無邪気に飛び跳ねるなどして、過剰に開放された達成感を演出せよ。夏休みのラジオ体操を思わせる陽気さで全身を動かせ。羞恥心無視だ。小気味にはしゃぐ感じで、常に自分が物語だと感じる努力を惜しむな。それが正しい希望のありかただ。

ここでは常にぼんやりと欲求が街を包んでいる。それは薄い幾重ものフィルターとなり、少しずつ何もかも変色していく。つまり温室効果に近い働きだと思われる。よほど五十億の幻が、渦巻く彼方に交差していく。

駆け抜けろ。

だからセンシは駆け抜ける塊だ。駆け抜ける。決して野や山を越えないが、ときに奇声を上げ国会議員に鉄パイプを振り下ろす。それが人間の活躍するギリギリの物語かどうかはわからない。だがいい。むしろそのくらいがちょうどいい。

「たとえば、食物センイに死体の山。」

——暗い留置所。背後には雷鳴がとどろき、フラッシュに似た雷光が何度も独房を照らし出しては消える。センシは一人俯きながら夜明けを待っているようにも見える。眠っているのか。いや、起きているに違いない。今夜はそんな夜だ。いくら畸形の物語とはいえ、国会議員に鉄パイプを振りおろしてただで済むはずはない。慣れない床の固さや独房のすえた匂いが気になり眠っていてもなぜか目が覚めてしまう、そんな夜に違いない。

背を丸めて床を見つめているセンシに、漠然とした不安が忍び寄る。不安は心を揺らしはじめた。暗がりでは一人、古いコンクリートの壁を見つめていると、ヒビが曖昧に笑う顔のように見えはじめる。何がおかしくて笑っているのか、つい想像してしまう。自分のことを笑っている気がしてきた。居心地が悪い。心が震えはじめた。自分が間違っている気がして、勝手に追いつめられていく。漠然と。

このままではいけない。「漠然」に対して具体性を与えてみる。先が見えない霧のなかで、己が想像したバケモノと闘う愚はしないからだ。そこでたとえば、いつの間になりゆきで過度なルーチン・ワークを迫られたときのことを、あてどなく仮想しはじめる。横に並んだ無数の白いワクを、書きづらくニャクニャ曲がる鉛筆でさり気なく一つ一つ塗りつぶしていく作業だ。隣に検査官がいて、さりげなさに対してのみ得点がつけられ報奨額が決まるらしい。

油がべっとり粗悪なスナック菓子の手で鼻をほじる検査官に自らの座席を勧めてみるが（軽く無視される。かといって自分も座席を立つ気配はない）、反応がないので試しに昨日観たテレビ映画の話題を軽くふってみることにしよう。

たくさんの血糊を使うことで有名な監督が、環境のことを考えトマトを原料にした新しい素材の血糊を導入したことで話題になった映画だろう。なるほど、今までより血糊がどろどろと固形に近い気がする。二時間ずっと至近距離で画面を凝視したせいで、白いワクも黒い鉛筆も未だにほんのり赤く色づいているようだ。

「でもあなたの顔色は幾分悪く見えますよ。菓子類ばかりでなく野菜の類も取ったほうがよいのではないですかね。なにしろ現代人はたんぱく質や炭水化物、脂質という三大栄養素ばかり摂取しがちですから。ビタミンやミネラル、食物センイなどを豊富に含んだ献立を心がけるべきではないですか」と、ときに親身に、だがところどころ意地の悪い口調で検査官に動揺を与え得点を甘く付けさせようと、得意の健康ネタを持ちかけてみてはいかかだろうと様子を伺っていたところで、ようやく気づいた。

こんなことではいけない。もっと現実を見つめない。たとえば、食物センイに死体の山。あんなに有益でよさげだったものが、実はこんなにも悪かったなんて。なんてのはどうだろう。現実を見つめたことにならないだろうか。ならないだろう。ならもうこの際あれでいこう、そう、双子の兄の存在。よくは知らないが、とりあえずいるかもしれないと仮定すると、それがことの始まり、すべての元凶のような気がしてならない。架空の兄から目を背けることもできなくなり、ついに運命の対面がまじかに迫っていることを知る。そうか、そういうことだったのかと一人ごちる。

というわけで、さあ、今こそすべての人々を大いなる物語の呪縛から解放し、新たな物語世界一決定戦の幕を上げよ。とりあえず鉄パイプならここにあると看守が鉄格子の一本を巨大な電動ノコギリで切り取って差し入れてくれた。優しかった。優しさを感じ

ずにいられない差し入れ方だった。優しい父もこうやってよく鉄パイプを差し入れてくれたのではないだろうか、記憶を探ったが特に思い当らなかった。

電光石火だった。大いなる物語は解体し、センシのいる留置所めがけて大勢の人が押し寄せてきた。留置所を倒壊させる勢いで我先にとセンシへ詰め寄ろうとする。看守はセンシの独房のカギを開け、大いなる物語が解体した今、自分も窮屈な椅子でシミのついた制服に身を包む理由はないと言った。看守が仲間になった。

さあ行け、と鉄パイプを手渡され、看守は電磁警棒を手にも、そのとき扉が蹴破られ、我こそ 21 世紀を牽引する物語の旗手であると猛者どもがセンシに襲いかかった。さあ、革命前夜のはじまりだ。

「白目。」（この回では新趣向として、次回予告が入ります。）

並みいる猛者どもを撃退しながら、看守は右腕のバッジを制服の袖ごと引きちぎった。特に理由はないが衝動的に、より発作的な動作こそがここでは好ましい。センシは右手の鉄パイプを大きく天に掲げる。当然のように落雷が彼を包み、パワーアップ。実際には天井の古びた蛍光灯を叩き割り、降りかかった破片が感電するセンシの姿を少しキラキラさせたにすぎないが、ショーアップの精神が心にゆとりを持たせることがより重要。襲いかかる猛者どもへの威嚇効果も兼ね備えている。その間に両足のズボンの裾も引きちぎった看守は、まさに無人島から帰国した残留兵状態に。みずからの電磁警棒で焦げの跡まで演出し、心境は一気にヒートアップ。恍惚状態で腹の底から絞り出した絶叫が、暗く狭い留置所いっばいに反響する。白目。

右へ左へなぎ倒しながら、残りは一気にドミノ状に押し倒し、外へ飛び出たセンシを待ち構えていたのは、もちろん双子の兄、セシン。左頬には噂に名高い深い傷あとが。その後ろにはすでに仲間となった無法者の一団が半円状に二人を取り囲んでいる。兄セシンが叫ぶ。

「仲間になれ！」

あとから駆けつけた看守も、状況から成り行きを察知する。

むろんセンシは天高く鉄パイプを振りかざす。待ってましたとばかりに雄叫びを上げるのは、留置所の屋根の上で今や遅しとセンシの出所を待ち受けていた一団。当然、兄セシン率いる無法者どもに親兄弟を殺された者ばかり。拘留を解かれ留置所から飛び出て来た前科者たちもセンシの仲間に加わる。

ぶつかり合う視線、飛び散る火花は背後に台風や落雷まで演出し、過剰な竜巻が二人の間に巻き起こる。均衡した力と力がすさまじい轟音と共に大地を割り、避け目から吹

き上がるマグマが二人を分かつ。否が応にも盛り上がる観衆たち。それを鎮めるかのごとく、ずっと右手を上げ聴衆を黙らせる、兄セシン。

「また会おう」

長いマントをひるがえすと号令一下、兄セシンの一団が引き上げていく。見事に統率された集団美に、セシン以下だれもが無言の賛辞を送る。身内を殺された人々でさえある種の敬意を。もっと早くに兄セシンが彼らの長たれば、無用な殺戮は起きなかったと悔やまれるところだ。いや、兄セシンはときに残虐で冷酷な一面もあるのでそうとも言いきれまいとは、看守の弁。

それを証明するかのように、何を思ったか兄セシンがくるっと振り返り、素早い動作で右腕をしならせた。パッと閃光が走り、セシンの右頬に鮮紅の血飛沫が上がる。あっと驚く間もなく、高らかに笑い声を上げる兄セシンとその一団。

「これは借りだ。次は命」

短い脅し文句に秘められた尋常ならざる体言止め。狂気と共に。

次回予告：セシンの前に現われた謎の老人。病名は末期ガン。余命短い彼に残された唯一の心残りとは？ 次回、「ワシの名は末期ガン」。乞うご期待。

「ワシの名は末期ガン。」（この回では新趣向として、ちょっとしたアドバイスがあります。）

「ワシの名は末期ガン。他に名前はない。呼びたければそう呼べ」

荒涼とした砂漠地帯を巡る乾いた風。大いなる物語が解体した時点で、世界の首脳たちは自らの物語と自問自答。各国政府の転覆があちこちで騒がれるなか、物語に自信のないだれかが不安に耐えきれず、自らの保身とちょっとしたやんちゃ心を満たすため赤くて丸い例のボタンへと手を伸ばす。一国の主になったからには一度は触れてみたい鮮やかな赤さと、どこか人なつこく洒落たユーモア・センスさえ漂う丸っこさに、各国首脳たちは弾かれたようにボタン連打。地球上はちょっとした放射能汚染地帯に。大地をそっと柔らかな絹の舌触りでなめ尽くす炎の歪みで、地球の地軸が少しずつ、重要な世界遺産を含む観光名所は粉ごなに。平時であればだれもが頬ずりして抱きかかえなくなる、愛らしいたくさんの小鳥や小動物も犠牲となる。もちろん人間を含む、あらゆる生物も燃え盛る炎のなかでくちゃくちゃと踊るように溶け、お好み焼きの上の鰹節を表現した前衛舞踏のように灰になっていく。後世の人々に刻まれた、「来光の世紀」のはじまりである。

「ここではだれもが末期ガン患者みたいなモンだ。生き残ってもこのざまだからな。だがあえて言わせてもらうが、ワシは正真正銘の末期ガン患者だ。ホントなら今ごろ病室の白くて固いベットの上で、見もしない昼のテレビでもつけながら、漠然とした痛みのなかで死ぬまでのひとときを過ごしていただろうな」

「まだワシのセリフだ、センシ。変わらんよ。何も変わらん。どちらも甲乙つけがたく悪趣味な野菜の品評会みたいなモンだ。ただ大きいだけのスカスカのカボチャや、下品な形をした大根やナスが来場した中年女性の、好色で興味本位なゲヒゲヒ笑いを誘うだけの見世物だ。くだらん」

灰のなかからそれなりに生き残った人々や動物たちは、とりあえず急場しのぎで生活するための住居や巣穴を作り始めた。ときおり吹く熱風に身を焼かれ散り散りになりながら、思い思いの場所に自らの理想とするたたずまいを目指してみる。しかしそのほとんどは完成せずに終わる。急ごしらえの廃墟があちらこちらにでき、砂を巻き上げる大竜巻がすべてをなぎ倒し進む。

比較的放射能の薄い地域に残ったセンシたちの集団でさえ、状況はあまり変わらない。むしろ生き残ったのが悪夢だと思えるほどに、寿命も短い。末期ガンのような老人はまれにしか見られない。

「それで、わざわざ何しに来た、センシ」

「わからない」

「教えてやろう。不安だ」

「...なぜ？」

「おまえは大いなる物語を解体したことに不安を抱いている。自分ごときが 21 世紀の物語の旗手たらんとすることが、あとこの世界をさらさらの砂漠に変えた責任もいっしょくたになって、おまえの右頬を蝕む」

「どうすればいい」

「最善の道などない。...かつてこの街でも、汚れない色とりどりの布をまとい、安くて手軽な食物を口にする人々がたくさんいた。だがその色が増えるほど、安くて手軽な平等が広がるほど、だれもがなしとしてきたゴミやワシのような浮浪者が増えた。それは当然のことわりだ。矛盾ですらない。

おまえがしたことも同じだ。不安を抱く類ではない。一度きりの人生なら好きにしたらいい。誇りを持ち闘って死ね」

「だが意味がないことはしたくない」

「おまえに意味などない。おまえは何者だ？ 意味はないよ、おまえに。おまえに意味があった試しがあるか？ 試しに意味でもつけてみるか？ 世界平和のため？ 闘うのが好きだから？ ちょっとした気分転換に？ 新しい世界の支配者になるため？ ハッ。そんなに天下統一がしたければチグリスハーンだろうと好きに名乗ればいいさ」

「からかうのはやめろ」

「待っているぞ、センシ。兄セシンが待っている。おまえに意味がないように、ヤツにも意味がない。だが待っている。」

「興味のない話だ」

「気取るな、センシ。不安だと言ったろう。おまえは不安を抱いている、自分が死なない

ことに。そこに素直な物語がある。死を待つ人間の物語を分かち合い、その苦悩を知れ」

「それはなんだ？ 何を知る？」

「すべてだ。世のことわりに潜む矛盾の向こう側を知れ。物語はよいぞ。これから血を吐いて死ぬワシのような末期ガン患者にも、細胞の一片に至るまで物語が染み渡っているようだ。なぜ苦しみ死ぬのに生きねばならん。生きることは矛盾そのものだ。この矛盾を越える物語だけが、ワシを生かし突き動かしている」

「何を言っている？」

「フッ、センシよ。照れながら告白しよう。ワシがこの歳まで死なん理由は、おまえに会うためだ。おまえと話し、矛盾を論じ死んでいくことで、ワシが生きた責任を少しでも果たさんとしてな。センシ、おまえは出会うだろう。兄セシンのほかに、同じ死なない身体を持つもう一つの存在と。すぐそこでお前に会いたがっているはずだ。早くいけ。老兵にかまうな」

センシは言葉を残すことなく去る。末期ガンの右手に握りしめられたのは、センシが拾った十円玉。情報料として。ぽかぽかと暖かい。手の外は冷たくとも、大事に握りしめられた手のうちは、常に暖かいものなのだから。

ちょっとしたアドバイス：末端冷え症には10円玉よりもショウガを丸一日、天日干ししたものがお勧めだよ！

「地を這うキャタピラこそ希望にふさわしい移動手段ではないか。」（この回では新趣向として、ちょっとしたこぼれ話が聞けます。）

「光が希望側だとなぜ決めた」

兄セシンは、来光後唯一残った古代遺跡のおあつらえ向きの玉座に大声で蹴りをいれ、脇に控える側近たちに聞こえる大胆な独り言を繰り返している。

「わかるか」

「わかりません」

側近の一人、独腕のライが頭を垂れ静かに答える。兄セシンがもっともひいきにしている、たった一人の左腕祭壇だ。

「あたり前だ。そこに理由はない。光や翼は希望側だと？ だれが決めた。おまえか？」

「兄セシン、それは独腕ではない」

右腕祭壇の一人である白眼のシイカが諭す。双子の片割れである黒眼のシンカは柱に背をもたれ腕組みして黙っている。黒眼は言葉を話すことができないからだ。もちろん白眼は目が見えない。二人で一人の右腕祭壇だ。

「そんなことはわかっている、白眼。私が理不尽なことを言っていると思うか？ 肯定で肯定するヤツらのほうが正しいと思うのか？」

「白眼にはわからない。白眼にわかるのは黒眼のことだけだ。黒眼はたまに泣く。それが白眼にわかるほとんどすべてのこと」

「おまえはそれしか言わない。だがかまわん。たった一つのことしかわからんおまえたちは強い。かまわん、それで。かまわないはずだ。いや、それでかまわんよ」

兄セシンの声が徐々にトーンを下げ静まっていく。側近らは身を固める。爆発の前兆だ。

「そうだ、むしろかまわないくらいだ。かまわないと思うよ別に。かまわないって言うるじゃないさ」

巨大な沈黙が古代遺跡の薄暗い内部を包んでいる。ピンと張りつめた緊張感。

「また荒れているな、兄セシン」

「だれだ！」

言いながら目を閉じる。それはだれか、声を聞く前からわかっている。

「私だ。兄セシン。どうした、何があった？」

「影在よ、聞け」

どこにもいない、影在の青田茂（あおたしげる）の声だけが聞こえる。今までだれも影在の姿を見た者はいない。ただ声だけが聞こえる。

「両腕祭壇が固まっているぞ。何を叫んでいる」

「光に翼が生えたものが希望だと、いつだれがどこで決めた。なぜブラックホールが希望ではない。地を這うキャタピラこそ希望にふさわしい移動手段ではないか。これは理不尽な言いがかりではない。だれもが見たではないか、あの来光の瞬間を。あれも光だったぞ。あれも翼が生えていた。一片の影もない白く巨大な光に包まれ感じた希望は、実は無限の絶望の始点だったはずだ。九つの次元を飛ぶおまえならわかるだろう」

「それは絶望でも希望でもない、兄セシンよ。ただの光だ。おまえにとってそれがいかに眩しかろうとも、どこかに影は存在していたはずだ。私は知っている。おまえが光に包まれていたそのときでさえ、他の次元はただ静かに振動を続けていた。光も闇も、その根は一つだ」

兄セシンは首を振る。横振りのなめらかさと、両腕を突き出す拒絶のゼスチャーが速やかにシンクロする。

「それが九つの次元を行き来するおまえの答えか？ 我が答えはただ、強すぎる光は闇を超えて暴走するというだけだ。強すぎる希望はやがてすべてを滅びへと導く」

「セシンが憎いか？」

「いや。憎むべくもない。半端な光は曲がり、闇に喰われるだけだ。希望も同じだろう？ 半端な希望は挫折と妥協を繰り返し、絶望の前で無力に朽ち果てるのみ。違うか」

「真実はない。おまえが作れ、兄セシン。そのために大いなる物語をセシンに解体させたのだろう。不安か？」

ニヤリと口元に笑みを浮かべ、カッと眼を見開く兄セシン。歌で例えるならここが大サビの部分だ。両腕を広げ立ち、あの鐘を鳴らすのが誰かを声高に断定する場面だ。

「我が存在こそすべて不安の源だ。中心には濁りが無い。...だろう？」

「そうだ、兄セシン。中心は常に静かだ。おまえたちは宇宙という巨大な縄跳びの両端だよ。片方が弾ければ宇宙は分解し、振動を止める。兄セシン、その果てに何を望む？」

「ただその振動が目と耳に障る。ヤツが持っている側の縄をこちらで調節できないなら、裁ち切って止めてしまうまでだ」

パン、と両手の平を合わせる兄セシン。おしゃべり終了の合図だ。

「おまえの絶望の濃さは闇以上だな。これで満足か？ 話がこれだけなら、私は行く」

「ああ、影在。また会おう」

にわかに左腕祭壇の周辺が騒ぎ出す。見張りに仕向けた左足祭壇の半人半猛禽どもが報告を持って来たのだ。独腕が兄セシンに近づき進言する。

「兄セシン、センシの一団が動き出したようです」

「そうか。フッ、老人は振動を止めたか。ついに宇宙は肯定を否定したようだな」

虚空を見つめる兄セシン。目には見えない何かをじっと凝視し続ける白眼に、そのままの姿勢で答える。

「心配することはない、白眼。神はもう殺した。肯定で肯定するヤツらの時代は終わった。新たな心臓が流す新鮮な血液は、決して濁らない。オレは否定で肯定する新たな皇帝だ。両足祭壇の半人半猛禽どもを至急回収しろ。全身祭壇を飾り、心臓を鼓動させる」

神を殺した心臓は、眉をひそめ静かに笑う。

「さあ、祭りの準備を始めよう。久々に影在の歌が聴ける」

絶望の先にあるさらなる闇が、今振動しはじめた。

ちょっとしたこぼれ話：影在の青田茂（あおたしげる）が前の儀式で歌ったのは3年前、そのときの選曲がああ鐘を鳴らす人物を特定する歌だったんだ。

「まるで踊る花だ。」（この回では新・新趣向として、逆に何も設定しません）

全身祭壇に祭られるのは、子宮と呼ばれる生け贄の少女だ。古代、闘技場として使用された遺跡の中央に、少女が据えられる大きな台が置かれる。四肢を縛られ、その一本一本をそれぞれの祭壇の長が裁断する。頭を裁断するのは影在の青田茂（あおたしげる）が操るかまいたちだ。兄セシンは血に染まる心臓をわしづかんで一呑みする。すべてが

裁断されたとき、身体の失われた部位が子宮を中心に発光しはじめ、突然腐る。それを笑いながら軽く受け流し、潜りこむように兄セシンは少女と同化する。みるまに少女の全身がぶるぶると、さながら携帯電話が着信時に起こすような振動をはじめ、新しく兄セシンの両腕、両足、頭、心臓が生え変わり、鼓動の着信メロディが鳴り出す。これが全身祭壇のもっとも重要な儀式だ。

生け贄に選ばれるのは、非常にまれな二つの条件を備えた少女である。まず、五体に畸形がないこと。そして、意識や環境の影響で肌の色が如実に変化すること。二つの条件がそろった少女を見つけるのは、並み大抵のことではない。

来光を経て生まれた子供はそのほとんどが畸形であり、片足や片腕がないのはもちろん、人間としての造姿をとどめていない者も多い。よって畸形を持たず生まれた子は、事故のないようすぐに兄セシンの抱える保育機関に送られる。また、近隣の集落からきれいな子供を探しだし、兄セシンに差し出す人さらい機関もある。そういった過程を経て保育機関に送られた子供たちは、光をいっさい遮断された空間に閉じ込められて亡霊のように過ごす。当然盲目となり、肌の色素はまるで巨大な皿に薄く盛りつけられた白身の生魚のように、透けるほど白くなる。その後、白日のもとに引き出されるとすぐ兄セシンと対面し、仮の同化による耐性の検査がおこなわれ、ほとんどの少女はこの検査に耐えきれず死ぬ。全身の毛穴から血を噴き出し、なんとも言えない感じの口の開けかたをする。心臓を抜くことなく兄セシンと同化するには、近づくだけで二の腕あたりが黒く変色する同調率が必要なのだ。

これらの難関をパスし、子宮と呼ばれる生け贄の少女たちは、畸形の数が圧倒的増加傾向にある現在においてほとんど国宝級である。しかも今回子宮としての資格を得た少女は、ここ数年にない奇跡と呼ばれるほどの能力を備えており、特にその美しさにおいて他の子宮たちを凌駕していた。盲目の少女はもちろん名前もなく言語も解さなかったが、世話人たちは彼女のことを陰で「セラフィン」と呼んでいた。だれかれとなく天使の名を思い浮かべる走りかたと、文字通り透けるような白い肌はセロファンの輝きを連想させた。

異例中の異例として、セラフィンだけが兄セシンから中庭への外出を許され、特に右腕祭壇の二人、白眼のシイカと黒眼のシンカに愛されていた。同じ盲目同士、白眼とセラフィンは手をつなぎ、黒眼が二人を引きまわしてよく遊んでいた。左腕祭壇である独腕のライは好んで眺めたものだ。それはなんとも胸のすく光景だった。緑の芝が生え、さまざまな明るい色の植物が咲き乱れる中庭は、いまだ小鳥や小動物の住み家でもあり、影在がずっと維持している外気を遮断する空気の幕「フィルター」が働いているおかげで、来光以前のカタチをとどめていた。フィルターは常に兄セシンを中心に半径一キロほどの広がりを持ち、中心に近いほどその効果は高い。セラフィンらのいる中庭は兄セシンが常に座る玉座の裏側にあり、平和に暮らすにはこれ以上の場所はなかった。

セラフィンはかくも周囲の人々に愛されていたからこそ、同時に兄セシンと同化することを強く望まれてもいた。彼ら側近にとって兄セシンと同化することは永遠の生を意味する。とにかく長いこと死なずにすむ。セラフィンが一体化すれば、今よりもっと親密に兄セシンを慕うことができるだろう。

そんな状況も解さず、ただセラフィンは両腕を伸ばし、走りまわることを楽しむよう

に笑った。笑うと、彼女の肌は桜色の花びらをまとったように染まる。まるで踊る花だ。

兄セシンはほとんど表情のない顔でそれを見ていた。なぜセラフィンだけが外出を許されたのか、やはりそこにも意味がないのか、影在にさえそれはわからない。だが意味があるとしたら。独腕はときにふと考える。兄セシンの持つ物語に魅せられたからこそ唯一兄と呼ぶ存在。その兄セシンにとっては初めての意味を持つかもしれない少女、セラフィンをときにうらやましく、美しく、妬ましくそして疑わしく感じる。兄セシンがそのことで悪しき方向へ向かうのだとしたら。いっそ殺してしまおうか。

独腕のライがそう思った刹那、少女の肌が全身うっ血したような真っ黒に染まった。それは自分の殺意が伝染したのだと気づいた瞬間、中庭を囲む人々が驚きの表情で自分を見つめている。白眼でさえ何ごとか察した。

独腕はあわてて窓をしめた。背中には影在の視線がはりついているように思われ、背筋を冷たく汗が伝う。だが違う。独腕も察した。それは決して自分だけの殺意ではなかった。その瞬間、自分よりもっと強力な感じのそれがあったはずだ。影在か、もしや兄セシン？ なぜセラフィンを？

考えるがわからない。だが、とにかく。頭を振り目を固く閉じる。そんなことに意味はない。自分は兄セシンに従うのみだ。それが左腕祭壇として課された使命であり、兄セシンの物語こそ唯一の生きる意味だ。そう決めたからこそ、畸形にしか許されない左腕祭壇となるため、自らの手で肩口から切り落とした左腕のうずきを鎮められたのだ。

隙間からそっとのぞいた中庭では、真っ白なセラフィンが何ごとともなかったように両手を広げ踊っていた。それがなぜきれいなのか、独腕は考えずにいられなかった。

「まるで巨大なアリだ。」（この回では一文を二十文字以下にします。新趣向として）

雨の匂いがして、少年は空を見上げた。胸騒ぎのような、蒸せかえるような匂い。死の灰が降るのだ。そして、空から黒い雫が。雨よ、降るな。もう降らないでくれ。願いも虚しく、額に落ちる一粒が悲しい。だが、ふと気づく。そうだ、この切なくも懐かしい匂い。ただこれだけは、以前と変わらぬ匂いだ。以前のまま嗅げる。そう感じて、拳を握り、砂を踏みしめる。嗅ぎながら、瞳は夢を含み潤んでいる。センシに会うのだ、そうすればきっと。強い信念だけが雨の匂うなか足を進ませる。

少年が歩く大地。ここでは怒号や骨の砕ける音が絶えない。それはまさに地獄絵図。逆に清々しいほどの血生臭さだ。人々はアメーバのように互いを食い合う。立ち止まって

はいけない。己の腕力や人望を常に磨き上げるのだ。たとえるなら顔が映るほどの刃物となれ。それも一流の匠の手による刃物を目指せ。もちろん切る意志があるときだけ切れる。触れる者みな切り刻む刃物は三流だ。なぜなら人は一人では生きていけないから。みんなで協力して巨大な敵に立ち向かおう。殴り殺そう。撲殺しよう。でないと逆に食われてしまう。やがて、そこに国ができる。今もいくつかの勢力が拡大している。

ここには、小人双龍と呼ばれる一団がいる。主に小人の人で構成された勢力だ。もちろん、小人たちは一人では無力だ。だから互いに身を寄せ合う。地下に潜み、縦横無尽に巣を張り巡らせる。そして、地表の人を襲う。まるで巨大なアリだ。

地表の人々もはじめは抵抗した。一対一なら負ける相手ではないからだ。穴から引きずり出して殴り倒せばいい。そのくらいに考え、油断する部分もあった。だが、気づいたときには遅すぎた。小人の巣はあまりに巨大だった。掘り進む速度が尋常ではないのだ。しかも巣穴は細く、小人仕様だ。彼らにしか潜ることはできない。そして、小人は巧妙に表の人を活用した。生かさず殺さず。つかず離れず。組んずほぐれつ。

普段、表の人は小さな穴に暮らしている。熱風から身を守る、たて穴式の住まいだ。小人の人はそれをエサ場と呼んだ。ある日突然、どこからか寝込みを襲う。可愛らしく笑いさえしながら、武器で殴る。そうして表の人が蓄えた食料をいただく。あまりに飢えたときは、表の人もいただく。表の人はあきらめた目をしている。突然襲われては闘いようがないからだ。背を曲げ、うつむき加減で歩く。小人の人たちに怯えているのだ。今も、雨で濡れぬためだろう。わらわらと穴から這い出してくる。無防備に歩き回っては襲われ放題だろう。しかし、注意力の糸は切れたままだ。結び直すゆとりはないらしい。徐々に増える人並みに、争いの予感がした。センシの元へ急がねば。少年は身を低くして人々の間を走り抜けた。

少年が走るには理由がある。噂の真相を確かめるためだ。その噂を聞きつけたのはずっと前だった。「鉄パイプを振りかざす鬼」。それはこんなふうに語られていた。

この世のどこかにあるという理想郷。そこは選ばれし者のみの楽園だ。草花が咲き誇る。小鳥が矢のようにびゅんびゅん飛びかう。空は青いまま、黒雨も降らないという。そこへ行けば、だれもが長寿を期待できる。健康な子供を生めるのだ。

だが簡単に踏みこめるわけではない。そこは神とともに移動する場所。神に許されぬ者には毒と同じ。その楽園を支配する神の名こそ、兄セシン。感情を持たず、子供を食らう。小人から子供を買っているとさえ言われる。しかも、きれいな子供だけ。いやらしくも恐ろしい神。入植できぬ民はいろんな意味で畏れをなす。言い知れぬ絶望感に包まれる。そこで、だれ彼となく語り出した噂がある。それがセンシだ。楽園を破壊するために生まれた悪鬼。真偽を知る者はない。だれもが噂を口にした途端、辺りを窺う。口ごもり、足早に去る。キャッチボール失敗。そして、ボールは転がりドブへ落ちる。

少年はボールを大事に持っていた。だれにも奪われたりしないように。ひそかに磨きをかけ、情報を集めた。彼なりの物語のために。ここで、幼い日の記憶がよみがえる。それは目の前で起こった。あっけない夢のような出来事だった。

あの日、辺りが暗くなり始める頃。だれかが掘った穴に家族四人で隠れていた。父親と、母親と、姉と自分。そして突然、穴の横から土煙があがった。あっと声を上げる間もない。そのモヤから一つ目の小人が現れた。家族の襟首を掴み、ひゅっと消えた。あ

まりに一瞬で、驚きの声も出ない。まるではじめからいなかったみたいだった。そして、少年は口がきけなくなった。

首を振り、白昼夢を追い払う。復讐するんだ。ヤツらに、兄セシンに。センシならきつとやってくれる。もうすぐだ。ついに突きとめたのだ。もうすぐセンシがここへやってくる。それは噂だったが、ずっと待っていた。小人をなぎ倒し、火を放つ悪鬼の姿を。高まる期待のなか、人の流れを逆に走る。急ぎ立ち去ろうと、振り返りもしない。

人波が徐々に途切れた頃、少年は気づく。ここは、まさか。足下に、何百という穴がある。巨大な虫の住みかのような。その一つから、小さな手が伸びる。慌てて右足を上げるも、バランスを崩す。転倒してすぐ、待ってましたと網がかかる。穴の向こうからやんやの喝采がわく。そこらじゅうの穴から予想通り出てきた。小人たちがわさわさと地蟲のごとく。おのおの手には小さい武器を持っている。お手製の可愛らしいスコップ兼オノだ。じりじりと身動きの取れない少年を狙う。その後ろにリーダーらしき小人がいる。白いボンボンがついた緑の帽子が目立つ。その一つ目に見覚えがあった。少年の家族をさらった小人の人だ。奴のスコップの先に黒いものが動いている。ムカデじみた細長い虫が刺さっているのだ。ニヤリと笑う。そして、グジグジいうのを、パクリ。ムシャリ。ゴクリ。それを合図に襲いかかる小人の群れ。わあっと甲高い蜜声が楽しげに聞こえる。少年を刺し殺そうとする。

少年は急いでライターを探す。右ポッケで汗ばんだ指がすべる。固い感触を人差し指がとらえた。次いで震えながら腰の改造花火を掴む。抜き取ると網と小人の人に向ける。小人の手をかすめ、すんでのところで点火。じゅっと溶ける小人の鼻の匂い。ぎゃあと悲鳴の間に、素早く脱出する。腕や腰にしがみつく何人かを振りほどく。ぎゅっと声を上げる小人の人たち。踏みつけるのもかわまず走り出す。歩幅の差を考えれば逃げきれるはずだ。みるみるうちに引き離していく。やったぞ。無数の穴をよけて走る、だがその先に。巨大な谷底に気づいた瞬間足は空を切った。落下しながら意識を失う。悔し紛れの涙が、浮遊して雨に混じった。

「行け、少年よ。」（この回では新趣向として、突然打ち切りの決まった少年漫画の最終回っぽくします。）

「起きなさい。さあ、早く起きるのよ」

…だ、れ？

「起きてごらんなさい。とりあえず起きてみて。とっとと起きるだけ起きやがれ。ふふふ」

え？

「そこで寝ていては危険よ。今に小人の人が探しに来るわ、あの一つ目が。あなたから家族を奪ったヤツよ。わかるでしょ、さあ」

わかる、アイツ。...だれ？

「ねえ、起きなきゃいけない。急ぐのよ」

どうして？

「そう。一つだけいいことを教えてあげるわ」

なに？

「あなたは、だれを探してる？」

ぼく...探す、だれか.....そうだ。センシだ。僕はセンシを探してる。

「そう、センシ。どこにいる？」

いる、きっといるさ。いや、絶対だ。いるに決まってる。なに言ってんだよ。いるじゃないか、そこに。

「そう、これがセンシ？ ふふ、なんだかぼやけて、まだはっきりとしない像だけど。そう、これはあなたの理想ね。でも、センシは人間じゃない。これとは違うわ」

なぜ？ 人間じゃない？

「そうね。会えばわかる。そう。あなただって、強く願えば会うことができるわ」

願う？ なにを？

「会うのよ。いい。センシに会うためには、強く願うの。センシは人間じゃないけど、なんにでも同化する能力がある。あなたが強く会いたいと願えば、あなたがセンシと同化することもできる。だれの心のなかにもセンシが住んでいるのよ。さあ、起きなさい。そして願うのよ。強く」

強く、願う。

「いずれわかる、さあ、起きなさい」

あなたは、

だれかがそこにいた。だれかがいるのがわかって、目が覚めた。小人の人かもしれない。どきっとして気づいた。ここは。暗い洞窟のような場所。どこにいる。だれが？ わからない。だいたい、ここはどこだ？

落ちたことを思い出した。あれはたしか崖だったはずだ。すると、ここは小人の住む地下の本拠地かもしれない。ここを中心に穴を掘り、小人の人が地表に姿をあらわすのだとしたら。慌てて身を隠す場所を探す。大の字に寝ている場合ではない。どこかで今も見られているかもしれない。やっと壁のくぼ地に身を潜める。どうも、向こうのほうでなにやら声が聞こえる気がする。身を潜めた岩から、ちらちらと様子をうかがう。なにやら動いている影だ。白いものが見える。あれは、白いボンボンだ。間違いない。ヤツの帽子についていた。ヤツはいったいあそこで何をしてるんだ。

「怖がってはダメ。あなたがセンシになるの。強く願うのよ」

そうだ。だれの声かはわからない。だが、少年は願う。僕はセンシになる。あいつらをなぎ倒して、両親や姉を救い出すのだ。子供の頃、手を握り合った双子の姉。楽しげに笑う姿がおぼろげに映る。真っ白い手はとてもきれいだった気がする。幼い手のその

先にある顔を思い出そうとして、姉が振り向く瞬間、一つ目の小人がぱくりと口を開ける。ダメだ。そうじゃない。みんなはもう死んだって言った。小人の人に連れてかれたヤツはみんな小人の人に食われて死ぬんだ。「でもおまえの姉はきれいだったから兄センシに売られたかもしれないな、どうせ食われるのは一緒だが」。乾いた笑い声が響く。ちがう。絶対にみんな生きてるはずだ。許さない。ヤツらは僕が倒す。

少年の両手が光り輝き出す。そう、少年が今センシに覚醒しようとしている。センシはだれでもない。それはあなたの内にいるあなた自身だ。さあ、今こそ革命のときは来た。少年はこれから決死の闘いを挑むだろう。小人の人に、その背後に鎮座する兄センシに。だが、センシが同化するかぎり、少年はかならずやその道を真っ直ぐ貫くに違いない。行け、少年よ。キミの旅はまだ始まったばかりなのだ。

――つづく。

「しばし目が光る。」（この回では新趣向として、ダイジェスト版でお送りします。）

少年はセンシになれなかった。両手に光ったのは花火に着火するためのライターだった。それがいけなかった。小人の人にあっさり見つかってしまった。それでも少年はそれなりに抵抗してがんばったので、偉かった。ダダをこねる子供のようなだった。生死を賭けたダダだった。

小人の人に囲まれ、首領の前に引き出される少年。一つ目の双子、ジックとダックがおいしそうに舌なめずりする。彼らこそ小人双龍の首領双龍だ。ファンシーな帽子の下に巨大な一つ目が、ぬるりと少年を見つめる。どきり、「食べられちゃう」と少年。

小人たちの宴が始まろうとしている。火を焚き、少年を囲み、思い思いにフトコロからフォークとナイフを取り出す。カラダに似合わぬ大きめサイズだ。頭の上でかちゃかちゃと合わせる仕草がコミカルで、切なくなる少年。こんなにも可愛い食べかたをされたらう家族を思うと不憫で悔しくて仕方ない。涙を流す。

その涙が少年だから純真でよかった。頬を伝い落ち地面に届く瞬間、すさまじい発光とともにセンシが現れる。純真さに惹かれたか、少年の涙と同化したのだ。心なしか微妙に膨張気味のセンシ。少年の期待がセンシと同化したに違いない。だが、ものの数秒で少年の期待は大きく裏切られることになる。心のなかにいるセンシと、実際に鉄パイプをかついで登場したセンシとは全くの別モノだったからだ。

まさに悪鬼。有無を言わず、次々に小人の人をふっ飛ばし岩壁に叩き付けていく。

噴き出す血しぶき。軽々とした暴力の使いかたには疑問の余地もないほど。しかも小人の人をやっつけるほどカラダがでかくなる不自然さ。頭を叩き割り、耳を潰し鼻をもぎ、腕や足をひしゃげ折る。返り血で咆哮する。さらに言葉を失う少年。その耳に、新たな声が聞こえる。

「これがセンシよ。本物のセンシはあなたの怒りや悲しみを背負って、より狂暴に膨らんでいるわ。あなたがずっと望んできた通りにね。でも、センシは変えることができる。全身で叫べば、きっと響き合い共鳴する。あなたにはセンシと同化する力があるから。さあ、望みなさい。声を振り絞るのよ」

逃げ惑う小人の人たちの弱り切った目には同情を誘われるものの、だからといってセンシの手が緩むはずもない。見るも無残な暴力の傍で少年は叫ばんとする。必死で声を取り戻そうと、伸ばした手の先に姉の幻影を見る。もう一度その白い手を握り返そうと、差し出した指にこびりつく生暖かい血潮。見上げると、両手に一つ目の首を高々と持ち上げたセンシの姿が。絶叫。

悲鳴によって覚醒するセンシ。しばし目が光る。そして、いつもの姿に。散り散りに逃げる小人たちを背に、少年に近づき、そっと腕に抱え上げる。二人を光が包み、次の瞬間、すっとこの場から消える。

「物語じゃないはじめの頃が面白かった」（この回では新趣向
というか、諸事情でだいぶトーンが変わります。）

ここまでの2002年の文章に一部手直しを加えたものだ。当時はいろいろ伏線も回収できるように考えを巡らせながら、とにかくノリノリで書いたのを覚えている。日本語に一泡吹かせてやる、くらいの心境だった。しかし友人が「物語じゃないはじめの頃が面白かった」と読むのに飽き始めたため急激に熱意が薄れ、結局書くのをやめた。

10年後の今となっては、あの頃の続きはどうやっても思い出せなかった。それでも、とりあえずセンシは兄センシと闘うのだろう。もちろんその前に左腕祭壇である独腕のライや、右腕祭壇である双子との対決があるはずだ。独腕のライは畸形になった見返りとして、切り取った腕の骨を巧みに操れる能力を授かったのだ。自由自在に飛んでくる骨に悪戦苦闘するセンシだったが、道中にきび団子をあげたら人懐っこくついてきた雑種犬のペスがその骨を上手に空中でくわえてしまう。そこでゲームセット。降伏した独腕のライを鉄パイプで撲殺。その返り血も乾ききらぬまま次いで双子と対決。それぞれ口と眼に障害を持つ双子は、その障害の代わりに他人の口と眼を操ることができるので、突然目の前に地獄絵図のような過去の光景が広がり、自分への呪詛の言葉を叫び続ける

センシ。具体的にはテストのとき自分なりの目標点数を決めろと先生に言われて、目標は常に100点だろと思って100点って書いたらそれを見た友達からみんなに知れ渡ってしまい、先生が「それは理想だが目標ではない」と書き直しを命ぜられ、仕方ないから80点くらいで書いて実際採点され返ってきたテストの点数は18点で、友達から「あれ、100点で言ってたよね」と冷やかされ、結果「目標100点」とあだ名されることになった過去をエンドレスでループされ、「あだ名は目標100点です。実際は18点でした。あだ名は目標100点です」と呪詛の言葉を繰り返し叫び続けるうち双子に崖の方へ誘導され万事休すと思われたが、看守の「俺は3点だった。勉強ができれば図書館員になりたかった」という断腸の告白でだれも何も言えなくなり、結局対決はうやむやに。うなだれる看守にうまい慰めの一言が見つからず、そのまま看守だけを残し一行は双子に案内され兄セシンの元へ。「看守の人によろしくお伝えください」という一言を残し、責任を感じた双子は崖へ飛び込む。他人の傷に簡単に塩を塗りこんだ自分たちを悔いて。

しかし兄セシンの部屋にはだれもいない。どこからか声が。影在の青田茂（あおたしげる）だ。突然話しかけられて驚いたセンシはとりあえず敬語に。

「え、青田茂さんですか、影在？（なんて読むんだろう）。どこにいるんですか？」

「つまりおまえが小人の人から助けた少年は、セラフィンと呼ばれる少女の双子の弟だ。少年と少女が会ったとき、死なない体を持つもう一つの存在、天使が誕生する。天使がおまえたち双子のうち、どちらか一人を殺すだろう。生き残った者が、末期ガンに代わる新しい神だ。神には特典としてほどほどの長寿が約束される。人間、短命はイヤだが不老不死も怖い。もうそろそろいいかと思ったくらいに死にたい。それが神だ」

そこで兄セシン登場。

「説明はそのくらいでいいだろう。消えろ、影在」

「それなんて読むの？」

「では私は消える。いずれ会うときもあるだろう」

思い切って聞いたのに無視されたと後悔するセンシ。だがよくあることとして切り替えよう。兄セシンの後ろにセラフィンと呼ばれる少女がいる。

「こうなる前にこの子宮は殺そうかと思った。センシ、おまえに一縷でも希望をくれてやるのが癪だからな。しかし生かしておいた。おまえの希望が絶望へと変貌する際の容貌が見たくなった」

「見たい願望に駆られたということか」

「乱暴なほどの欲望にな」

茫々たる会話に終止符が打たれ、主に二本の長い棒を使った争いが始まる。センシが持つ鉄パイプと、兄セシンがペスから取り戻した独腕の骨がぶつかり合い、激しい火花を散らす。

「独腕の骨は独特の曲がり方をするので、闘いの時はとても重宝する逸材だと思う。つばぜり合いをしながらおまえの脳天を突き刺す蛇のように狙っているぞ」

「それはまさに接近戦闘時の必需品と言えるな。しかし鉄パイプもキラキラして敵を威嚇したり、眩しきで一瞬、敵の目をくらますなどの効果が期待できるのではないだろうか」

そんな激しい攻防のさなか、少女と少年は一人の天使となり、闘いを見つめている。

「そこで俺は眩しい時にはサングラスなどで視界を遮光することになっている。更に UV カットされた物を使えば日焼け防止にもなるしな。しかしセンシよ。この闘いがおまえと俺の物語の闘いである以上、敢えて問おう。おまえが闘う理由、おまえの物語とはいったいなんだ。まさか、世界平和などという食物連鎖に逆らった机上の世迷言や、みんな違ってるからみんないいときもあるし逆に悪いときもあるよね、程度の一般論のために闘う訳ではあるまい？ 俺を倒した後、おまえはこの世界にどんな物語を広めるつもりだ」

「ならば俺も敢えて答えよう。双子の兄、セシンよ。もしそれが可能ならば、俺に物語を広める力が与えられるのなら、俺は叫ぶだろう。他人の金という正義のために、自らの命という正義を危機にさらす人々がいる、その現実を誰もがみつめ己の正義について悩み闘う物語こそ、俺の望む物語であると。光はその明るさの中ではなく、遠く闇の中から見つめるからこそ輝くと」

「ふ、やはり甘いな。歯が浮く。独腕の骨もカタカタと笑っておるわ」

「いや、この軋む音は。...ヒビだ。骨にペスの歯形がついているぞ。さてはそこが弱点か」

センシは鉄パイプを歯型の部分目がけて強振する。骨は砕け、兄セシンは降伏する。

「ふ、ペスに感謝するんだな」

「歯形がついていなかったら俺の負けだったろう。間一髪だ」

何気に感謝されるペス。

「勝負がつきましたね。それでは兄セシン。行きましょう」

「わかった。.....待て」

兄セシンはそう言って振り返るや否や、骨の破片をセンシの左頬に投げつける。真紅の鮮血が飛び散り、結果両頬に傷を負うことになったセンシ。

「何をする」

「.....センシ、おまえが生き残ったら暴動せよと手下どもには言い聞かせてある。俺が生き残って合言葉を叫ばぬ限り、暴動は鎮められない」

「どういう意味だ」

「左頬に傷を持つ俺と、右頬に傷を持つおまえ。双子の俺たちを見分けるすべはそれだけだ。だがもし闘いのとき両頬に傷が付けば、俺とおまえはもはや見分けがつかなくなる。合言葉を教えてやる。おまえが俺になりすまし叫ぶことで、手下どもは暴動をやめるだろう」

「ふざけるな、なぜ俺が兄セシンを名乗る。だれが暗黒の王になどなりたいものか」

「光の人たちと和平を結ぶと宣言すればよいだけだ。次いで暗黒の人たちは解散だと。各々がそれぞれ別個で活躍する場を見つけるよう、力強く公言すればよい。それですべてが元に戻る」

「しかし、私には騙しおおせる自信などない」

「騙すのではない。おまえは生まれ変わったのだ。おまえが胸を張り確固たる自信を持って叫べば、それこそが真実になる。物語の糸が何度も切れそうに見えなくとも、ここまで辿って来れた読者を信じろ。それに、無茶なあらすじでも途中で物語の糸を手放すことができず、最後は諦めながらでも辿るのが読者のサガというものだ。つまり、すべて

はおまえの決意次第だ」

センシは決意する。ペスも決意する。兄セシンは合言葉をそっと耳打ちすると、薄く笑ったような気がする。ペスも笑った気がする。天使が兄セシンを連れて行く。ペスも。天使と兄セシンとペスがゆっくり大空へ舞い上がる様は、明らかにアニメ版のフランダースの犬のラストを意識していると思われる。おぼろげなテーマ曲を思い出そうとするセンシだが、そんな場合ではないと思い直す。

そうだ、この部屋の扉を開け、世界に向けて発信せよ。新たな革命の首謀者となる自分の名を。さあ、扉を開け放て。肺いっぱい空気を吸い込み、バルコニーの下で待ち構える群衆に大声をはり上げろ。

「我は名はセシン。改革を望む者なり。革命せよ。各自。今から。各々の持ち場で。手弁当で。現地解散で。我が名はセシン。我こそは革命を希求する者なり！」

「あとがきにかえて」（弦楽器イルカを名乗る前の覚え書き。
一部加筆）

白いシェードを被った暖色のライトスタンドが、15畳のリビング・ダイニング・キッチンに照らしている。茶色い牛革のソファに横たわる妻と、それを背にタモ材のダイニング・テーブルでノートパソコンを打つ自分。

波一つない夜の海に浮かぶ箱舟の内部、終末の風景を想像する。傍らでは、船体が海をなでるような静けさで、ひたすらに部屋をプラズマ除菌し続けるタイガーの加湿器が、流れ着いたヨットのように現実を連れてくる。もちろん、苦笑と共に空想はそこであり、霧散するが、この静音のBGMも決して悪くはない。

妻は背後でファッションに関する雑誌を眺めている。たぶん美的とか sweet とかいう類の雑誌だろう。それらに費やす時間と費用が私に理解できないというだけで、軽くケンカをふっかけてしまった過去もあったが、今ではその論争が不毛であったことを苦い痛みとともに理解している。人がリラックスする過程に、決まった形などないのだ。

「先ず隗より始めよってことだよ」

「え？」

突然の話題転換に、当然、妻が驚いたように答える。

「恨みはないし、やっかみもあら探しも趣味じゃない。それに歌は歌詞だけでなく、曲や歌声や演奏が一体となった文化だとも思う。ただ、この歌詞が抱えている決定的な弱点は、『見舞いの翌日におばあちゃんが亡くなったのは、自分を待っていてくれたんやね』という感動的な呼びかけと、『トイレには女神様がいる』という教えに全く関連性が

ない、という点。その証拠に、この教えが『黒猫を見たら三步下がれ』とか、『雛人形は早く片付けないと嫁に行けない』とかであっても、この歌は矛盾なく成立する。『気立ての良いお嫁さんになるのが夢だった私は、3月4日の0時ピッタリに雛人形を片付ける』ってなっても、前後の脈絡に問題はない」

「それ、面白いね」

妻が背後で、雑誌をめくりながら笑う。

「また、最後の『おばあちゃん ホンマにありがとう』っていう感謝が、そもそも何に向かってるか非常に曖昧だけど、もしも『トイレの神様』を主題に置きたいなら、『おばあちゃん、トイレの神様の話をしてくれてありがとう、おかげで私は誰が見てもこんなべっぴんさんだし、幸せな結婚もできちゃった。神様最高です！』ってなる。でもそれじゃ感じ悪いし、いまだに結婚もしてないはず。結局、『こんなわたしを死ぬまで待っていてくれてありがとう』程度の意味なら、『トイレ（にいるはず）の神様』は全く感謝されてないただの門外漢だ。

ただ、この歌のすごさはそんな理屈じゃない。そもそも誰も気づかなかった感動の源泉を掘り当てたってこと。すれた職業作詞家じゃ、こんな初歩的なスポットにこれだけの感動ニーズがあるなんて、完全に見逃してたはず。ある意味、逆転の発想だよ」

「また、イヤミだね。くどいよ、説明が」

「だって思ってるくせに誰も言わないんだぜ。この程度の批評さえ、ネット以外のメディアは簡単に扱わない。結局、大手メディアの本やCDやテレビが廃れてる原因の一つは、現実と乖離しすぎた絵空事を語りすぎてからだと思う。活字離れて言ってもネットで活字追ってる人も多いし、その方が本音に近いからすっきりする。同じことが本にも言えるんじゃないかな。物語の中だけで完結して現実に置いてけぼり食らわす絵空事に、いい加減飽きてきてる。最近じゃ本屋行っても、出版社にわざわざ高い金払って売れ線の本をありがたく頂戴してる文学乞食って気さえして、嫌になる時がある」

「それは言いすぎだと思うけど」

「まあね。ただ今自分が仕事して食ってける生活に満足してるから、気づいたんだ。昔は正直、今の生活から逃げたくて書いてた。恥ずかしいけど、作家になって一発当てよう的な。でも、そもそもの出発点はそこじゃない。書きたいから書いてたんだ。あの巨漢の女装家でさえ本の中ではあの程度しか語れないんだったら、委縮せずに好きなこと書くにはむしろ『変なこと言う素人』の立場が一番なんじゃないかな。読者はとりあえず一人二人確保してるし」

「あたしとかのこと？ でもそれじゃ、どんな話が書きたいの？」

「たとえば、入れ換わらない話」

「え？」

「最近もドラマ化された小説で、死んだ母と娘の魂が入れ換わるとか今さらな話があるらしいけど、それが入れ換わらないの、全然」

「そんなの入れ換わらなかったら普通じゃん。ただの現実じゃん」

妻が呆れた口調で答える。しかし、完全に雑誌よりこちらの話題に興味を奪われているのは間違いない。

「現実を突き詰めた物語だよ。たとえば、衝突事故で生き残った自分のほうを見て、小さ

な子供が叫ぶの。『僕のパパは死んでない！ だって、この人にパパの魂が乗り移ってるんでしょ？ 絵本に書いてあったよ』って。そこで、しばらくパパの代わりを頼まれるうちに、その家庭と、そして自分も抱えていたある事情に気付いていく」

「ああ、そういうことね。でも、その程度の話なら別に職業作家でもできるんじゃない？そこまで批評性をむき出しにしないで、普通にいい話として持ってけるんじゃない？」

「でもとりあえず俺の構想ではさ、主人公は原作の小説とか破くね、無駄に。『どいつもこいつも入れ換わる話ばっか書きやがって、現実で簡単に入れ換わってたまるか！』って。あと他には」

「まだあるの？ だいたいそれ言いがかりじゃん完全に。よっぽど不満の多い人と思われるよ」

「まあね。ただ、読み進めてもらうためには、絶対に続きが気になるものを書かなくちゃいけない。それってすごく報われない頑張りだよ。努力して書いても、恨まれる。でもカッコよくない？」

「カッコよくない全然。意味分かんないし。ただのバカだね。でもそれで、他のは？」

「こっからが現在の一部加筆なんだけど。高校生の頃に人生ではじめて書いたけど挫折した小説があって、今それをもう一回手直ししてる。この今こそ形にしたいと思ってる。それができるまでとりあえず前置きしておくかって意味でこれ書いてるんだけど。次のがもし完成すれば、良くも悪くも自分の集大成になると思う」

「そうなんだ、うまくいくといいね」

「ありがとう」

もちろん、ただのバカでいることに全く異存はない。自分がどうやら特別ではないと遅ればせながら気づいてしまった残念な自分だ。ただ、残念は残念なりに、自分が面白いと思う自分でありたい。そのうち本物がやって来て世界を革命する。それを待ちながら偽物としてお茶でも濁そう。ついでに茶化せるなら茶化そう。

次に書くものこそ、これで最後になってもいいと思うくらい自分を納得させられる文章であってほしい。死ぬまでそうやっていくなら、それでよしとしよう。

奥付

著者：弦楽器イルカ

感想はこちらのコメントへ

ブックログのパプー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31934>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

{{-
-}}

Senshi-Dive

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
